新　刊

□金井弘夫（編著）：**日本植物分類学文献総目録 1887-1993.** I（累積版），II（索引版）I：viii＋1580pp.，II：iii＋616pp. B5判．1994．アボック社．￥100,000（2巻セット，税込み）．
□金井弘夫（編著）：**日本植物分類学文献目録** 目録・索引5　1887－1993．vii＋511＋616pp. 1994．アボック社．￥47,000（税込み）．

「日本植物分類学文献目録　目録・索引1973-1982」が1985年に出版されてからちょうど10年になった．この第1巻と言うべき本はメインになる著者名のアルファベット順による文献目録約1万2千件と，それを被子植物，シダ植物などの植物群別の索引，日本では県別，世界ではおよそ大陸別に分けた地域別の索引，文献が扱っている内容の大分けによる雑項目別の索引，人名索引，それに植物名索引で引けるようにし，さらにこの索引のバックグラウンドとなった集録誌の一覧，科の学名・和名対照表，属の学名・和名対照表，それに植物関係研究団体・専門機関一覧，というのが付録についていて，総頁614頁のA4判のソフトカバーのものであった．編著者がなぜこのような出版物を出そうとしたのか，そしてどのような経緯を経て実現の運びとなったのかはこの本の序などに述べられているが，それを利用する立場の人達にとっては，理想的な文献目録があれば文句無しに有難いことであるのは明白である．しかし，その理想的な目録というのは全くの無から一足飛びに実現出来るものでは無いことも事実で，だからこそ多くの研究者がこのようなものを編むことをためらい，結局何人もなし得なかった訳である．それを実現した金井氏の秘訣は「最初から完璧なものを目指さず，欠落していたものはあとから追加し，誤りは見つけ次第直して行けば，何時かは完成する」という立場にたち，「出来るところから集録して行く」という戦術をとったことに尽きるようだ．これはこの最初の巻が1973年～82年の10年間の分を扱ったのに対し，第2巻（1987）では1973年～1985年と，新しいものを集録する一方，前巻で抜けていたものを極力集録して，新たに約8500件を加えた．そしてここでは初めてこのようなスタイルの文献目録を世に問うたことにより明らかになった問題点を改良している．続いて1960年～1986年を集録した3巻（1989），1945年～1988年を集録した4巻（1990）が出版されるに及んで，最初の巻では編著者自身が言っているように余りにも欠落が多くて実用性をあまり持ち得なかった最初の巻（1巻とは銘打っていない）から，大幅な改善と格段の精度を持った文献目録となってきたのである．

そしてその一応の集大成として本書全2巻が昨年暮れに出版された．これも金井氏自身が言っているように，これで決して完璧なものでは無いが，彼自身の退職により，一つの区切りを付けることもあってまとめたようである．我が国の植物分類学のひとつのナショナルセンターである国立科学博物館の植物研究部の責任者としての仕事としてけじめを付けた氏の生き方には共感が持てる．これは集録年を1887年～1993年とし，上記4巻に集録されたものに新たに加えて全体をまとめたものである．総目録と銘打つだけあって，近代西洋科学としての植物学が根付きはじめた19世紀末からの文献61,182件を網羅している．そして集録の主力というか力点を，一般にすぐ目につく学術専門誌から，ここに集録されてなければほんの一部の人々にしか目に触れることがなくなってしまう，あるいはそうなっていた地方誌，同好会誌などの出版物を極力集録することに移している．これは専門誌は集録し易く，あまり努力しなくとも集まるが，そうでないものは極めて難しいからであり，このシリーズを刊行する度に氏が資料の提供を呼びかけてきたことがかなり実を結んだのではないかと推察する．評者自身，学生の頃に同好会誌に書いたものがあげられていて，赤面した次第である．

最初の巻からこの間ちょうど10年を経過したが，氏の10年に及ぶ精力の多大な投入をもって遂に最初の巻で目指したものが出来上がった，という感じである．そして，それを電算機処理によりデータベースとして公開を旨としている．すごい，としか言いようがない．更に驚くのは次の2点である．この本は決して安いとはいえない値段で販売されてきた．この総目録も100,000円という，個

人ではなかなか手のでない値段である．こうゆうところで文字にするのは気が引けるが，正直言って大学の研究室と言う所は大変貧乏なところである．非常に限られた研究費で学生から教官まで，勉強し，研究している．本は買いたくても買えない，あるいは教官が自腹で買ってそれを研究室に置いてみんなで利用する，というのが当たり前のところである．そこで金井氏は全国のしかるべき研究室，標本庫にこれらの本を寄贈してきている．これはこれらの本が本当に利用されてこそ意味がある，という氏の哲学の実践であろう．第二の点は，出版社である．私のようなものから見れば到底採算ベースにあわないのではないかと思われる，このような出版物をよくぞ出してきたものである，と常々思っていた．その極め付けが今回の処置である．本書評の表題に掲げた後半の「日本植物分類学文献目録　目録・索引5　1887－1993」とあるのは前半の総目録がこれまでの全部の文献を集録したものであるのに対し，これはその中から既刊の4巻に付け加わったものだけを再編集して集録し，索引部分は総目録の「II（索引版）」と同じものを載せている．つまり，これまでの4巻の延長としての第5巻をわざわざ作ったものである．これはこれまでの4巻を既に持っているところが内容が重複する総目録を買わなくともこの巻だけを買えば良いようにとの配慮である．これは，売る方としてはなかなか，いやほとんど出来ないことである．これにはほとほと感心させられる．

それにしても，こうして改めて文献目録全巻を見ていると第1頁目にいつもある故阿部近一氏の著作が目に止まる．阿部氏が徳島県の植物の調査にいかに貢献してきたかが窺える．金井氏のこれまでの精力的な働きを以てしても集録出来なかった文献が今後も見つかって行くことだろうし，何よりも学問の世界は一時の休みもなく進んでいて，新しい文献が次々と発表されている．このように植物史の文献を最大もらさず集録して行く努力は金井氏を継いで誰かがやって行かなければならないことだとつくづく思う．そうして日本の植物史のデータベースがより完璧なものになり，植物学研究のためはもとより，日本の植物的自然とその変遷の記録としても，また植物研究者，愛好家などの「人間の歴史」として大きな意味を持つと思われる．（東北大学大学院理学研究科　鈴木三男）

□金井弘夫（編）：**地名レッドデータブック**　16＋2286＋194pp. B5判変形．1994．アボック社．¥92,000（税込み）．

1976～78年に出された「全国地名索引」（全国地名索引刊行会）全7巻，1981年の「日本地名索引」（アボック社）上下2巻，そして1993年の「新日本地名索引」（アボック社）全3巻に引き続く金井弘夫氏による地名索引の本である．「日本地名索引」は昭和20年代から40年代に国土地理院から出された20万分の一の地勢図にのっている地名を金井氏考案の地図座標（5万分の一の地形図を16に分割した区画）で表したものである．これは地名を拾った基図が粗に過ぎるきらいから，「新日本地名索引」ではぐんと細かくして2.5万分の一の地形図から38万件に及ぶ地名を拾うという，恐ろしいことを行った．そして，旧版で不十分であった点の改良が随分となされているが，その一番大きな点は地点座標を図幅番号を基にしたものから緯度・経度を分単位で表す方法に改めたことである．この改良によって地点データがそのまま世界的に使えるようになった．この新しい索引が植物地理学のみならず人文地理学を始め，地名を扱う必要のあるすべての研究分野や業種の人達にとって極めて有用なものとなったのである．「地名探し」を趣味としている人や推理小説家なども使っているんじゃないかと思ったりする．こうして地名索引が大きな実用性を持つようになると，本紙で大橋広好氏（69巻 p.60, 1994）が指摘しているように「古い地名」の索引の必要性が痛感されることになった．

金井氏はこれらの索引を氏自身の植物分布図作成のために開発してきたのだし，私たちもその目的に大変重宝しているのだが，標本庫に収蔵されている古い標本には当然のことながら当時の地名で産地が記されている．ところが，私は正確には知らないが，国土地理院が昭和40年代頃から20万分の一地勢図，5万分の一地形図の再編纂を順次手掛け，そして色刷の図幅が出されるようになった頃から，図幅が新しくなる度に載っている地名